

江戸聖一郎 博士学位申請リサイタル

ドゥヴィエンヌのフルート協奏曲

～音楽に仕掛けられたレトリックの秘密～

2014年12月17日(水) 19:00開演(18:30開場)

京都市立芸術大学 講堂

Program

F. ドゥヴィエンヌ: フルート協奏曲 第9番 ホ短調

F. Devienne: 9^e Concerto pour Flûte et Orchestre, mi mineur

I. Allegro

II. Adagio cantabile

III. Allegretto con variazioni

F. ドゥヴィエンヌ: 2本のフルートのための協奏交響曲 ト長調*

F. Devienne: Symphonie Concertante pour Deux Flûte et Orchestre, Sol majeur

I. Allegro

II. Adagio - Allegretto con grazia

フルート: 江戸聖一郎, 瀬尾和紀 (*)

ヴァイオリンI: 中野千瑛, 柴田夏未, 西尾安梨沙

ヴィオラ: 中野祥世, 佐本博子

コントラバス: 大加戸まゆ

オーボエ: 山田千晴, 松本みなみ

ヴァイオリンII: 三輪めぐみ, 藪野巨倫, 堀江恵太

チェロ: 片山英摩

チェンバロ: 河合珠江

ホルン: 矢野めぐみ, 八木美有

休憩(10分)

A. ジョリヴェ: フルートと弦楽のための協奏曲

A. Jolivet: Concerto pour Flûte et Orchestre à Cordes

Andante cantabile – Allegro scherzando

Largo – Allegro risoluto

フルート: 江戸聖一郎

ヴァイオリンI: 中野千瑛, 柴田夏未, 西尾安梨沙, 赤松由夏

ヴァイオリンII: 三輪めぐみ, 藪野巨倫, 堀江恵太, 矢木紀子

ヴィオラ: 中野祥世, 佐本博子, 伊藤愛梨

チェロ: 片山英摩, 孫工恵嗣, 江口陽子

コントラバス: 大加戸まゆ, 赤松美幸

指揮: 粟辻聡

曲目解説

江戸聖一郎

フランスのフルート奏者であり、パリ音楽院フルート科初代教授を務めたフランソワ・ドゥヴィエンヌ François Devienne (1759-1803) は膨大な数のフルート作品を残し、またこの時代における重要な教則本である『フルートのための新しい理論的・実践的教則本』(1794) を著したことで知られている。彼の音楽家としてのキャリアは、1780年、当時のパリの楽壇の中心であったコンセール・スピリチュエルにファゴット協奏曲 (E.オジによって初演) で作曲家としてデビュー。82年には自作のフルート協奏曲を演奏してソリストとしてもデビューを果たした。フランス革命という社会が激動する出来事の真ただ中で、フルート奏者、教育者、作曲家として大きな成功を収めながらも、1803年に精神疾患のためシャラントンの療養所に入院し、その時の秋に44歳で死去した。

本日のプログラムはフルートにおけるフレンチ・スクールの源流とも言うべきドゥヴィエンヌの協奏曲と、20世紀を代表するフルート作品のひとつであるアンドレ・ジョリヴェのフルート協奏曲を合わせてお聴きいただくものである。作曲年にしておよそ150年の隔りがあるこれらの作品は、当然ながら旋律、和声、リズム等、どれをとってもまったく異なる作風を持つが、フルートという楽器の性能を熟知し、聴衆への巧みなアプローチが見られるという点において共通するものが根底にあるだろう。その対比を通して、歴史の延長線上でつながるものを感じていただければ幸いである。

音楽に仕掛けられた「レトリック」の秘密

ドゥヴィエンヌは上述の『教則本』において、アーティキュレーションの解説に大きな力点を置いている。奏法解説のおよそ半分のページをそこに費やしていることから、彼がアーティキュレーションの持つ、聴衆にアプローチするための力を重視していたことがわかるだろう。ドゥヴィエンヌの示したアーティキュレーションの技法は殊更、当時において斬新なものであったわけでない。むしろ、先達のオトテールやクヴァンツの示したアーティキュレーションの方がより論理的で、そこに深い意味を持たせていると言えるだろう。しかし、そのようなバロック的なアーティキュレーションは教養に裏打ちされた「良い趣味」に基づくものであり、演奏者にも聴衆にもある種の「理解」が求められる。ドゥヴィエンヌの時代は、フランス革命によって社会が大きく変化する最中、演奏会の聴衆も教養ある貴族から、中産階級の一般市民へと変化していった頃である。それゆえにドゥヴィエンヌをはじめとする18世紀末の演奏家たちは、より感覚的・印象的にわかりやすく聴衆にアプローチする手法が求められていたのだろう。

たとえば、ドゥヴィエンヌは協奏曲の中に必ず技巧的なパッセージを誇示するためのセクションを複数回設けている。そこでは16分音符や3連符が連続する難易度の高いパッセージにさまざまなパターンのアーティキュレーションを次々と提示することでヴィルトゥオーソ性を強調するのである(しかも、それが必ずしも本当に難しいとは限らない)。また、ドゥヴィエンヌの作品にはセクションの終盤になると必ず現れる定型的なアーティキュレーションのパターンが見られる。このようなパターンは聴衆の耳を刺激し、和音の高揚感を聴き取ることを助けるだろう。

このように、ドゥヴィエンヌが仕掛けたアーティキュレーションのパターンは極めてレトリック(修辞法)的であると言える。レトリックとは、言葉を美しく巧みに用いることで効果的に表現することであり、古代ギリシャにおける裁判などの弁論から生まれた学問の一分野である。18世紀のヨーロッパではまだ、レトリックは重要な学問の一分野であり、音楽においても応用することが試みられていた。ドゥヴィエンヌが「レトリック」という言葉や学問を直接的に意識していたかどうかはわからないが、そこに見られる考え方はまさに聴衆に対する説得力の強化であり、音楽における大勢の聴衆に対しての雄大な弁論術である。

F.ドゥヴィエンヌ：フルート協奏曲 第9番 ホ短調

ドゥヴィエンヌはフルート作品だけで、250曲を超える膨大な数の作品を残しているが、その中でもフルート協奏曲は特に重要な位置を占めていると言えるだろう。ドゥヴィエンヌの作品群のうち、もっとも数が多いのはフルート二重奏や、フルートと通奏低音のためのソナタなど、二重奏作品であるが、これらのうちの多くはアマチュアのフルート愛好家たちを対象にしたものであると考えられる。一方、フルート協奏曲は全部で13曲（番号の付けられたものが12曲、番号のないものが1曲）存在し、そのどれもが演奏難易度の高い内容を持っている。これらは、おそらくドゥヴィエンヌがコンセール・スピリチュエルなどのソリストとして自分が演奏することを想定したものであり、彼自身の作曲技法と演奏技術を如実に示すものであると考えて良いであろう。

ドゥヴィエンヌの作品は、残念ながら現代においてその価値が広く認められているとは言えず、演奏される機会は決して多くない。《フルート協奏曲第7番 ホ短調》だけはJ.P.ランバルなどフランスの往年の巨匠たちが好んで演奏していたこともあって、ドゥヴィエンヌの作品の中では現在でも演奏される機会が多い。しかし、この第9番もおなじホ短調の作品であるが（ドゥヴィエンヌの協奏曲のうち、短調で書かれているものは第7番と第9番の2曲だけである）、ドゥヴィエンヌの協奏曲群の中でも演奏されることはほとんどなく、コンサートで実際に聴くことができるのは貴重な機会であると言えるだろう。

ドゥヴィエンヌの作品があまり取り上げられない理由のひとつに楽譜の問題がある。ドゥヴィエンヌの楽譜はすべての作品において自筆譜だと認められるものが見つかっていないため、現在の演奏におけるソースは当時の出版譜に頼らざるを得ないという問題がある。しかも、それらは細部において不備があることが多く、とくにこの第9番は小節の欠落や、パート間で大幅な差異が見られるために、慎重な検討を経た楽譜校訂が必要となる。残念ながら、ドゥヴィエンヌに関する研究はそれほど多くなされておらず、現時点では第9番を含めた半数近くのフルート協奏曲のモダン・エディションが出版されていない状況である。尚、本日は1800年代初頭にドイツのAndré Offenbach社から出版された楽譜（パート譜）のファクシミリからスコアを作成し、原典をできる限り尊重した上でミスの修正を行った、江戸による校訂版を使用する。

《フルート協奏曲 第9番》は他のフルート協奏曲と同様に、第1楽章はやや変則的なソナタ形式（展開部の代わりに第2提示部が置かれる）によるAllegro、第2楽章は自由な形式で書かれた緩徐楽章、第3楽章はAllegrettoの主題による変奏曲という構成を取っている。ドゥヴィエンヌの協奏曲の第3楽章の多くはロンドー形式によるAllegrettoであるが、第5番と第9番のみ変奏曲の形式を採用している。

F.ドゥヴィエンヌ：2本のフルートのための協奏交響曲 ト長調

18世紀末のパリにおいて、複数の楽器を独奏に立てる「協奏交響曲」というジャンルが大流行した。その独奏楽器の組み合わせは様々であり、モーツァルトの《フルートとハープのための協奏曲 ハ長調 K.299》や《フルート、オーボエ、ファゴット、ホルンのための協奏交響曲 変ホ長調 K.297B》も当地での流行スタイルに合わせて作曲された作品である。ドゥヴィエンヌも様々な編成による7曲の協奏交響曲を作曲しており、自身の独奏や、同じオーケストラで演奏していた管楽器奏者たちによる独奏が想定されていたと考えられる。

《2本のフルートのための協奏交響曲》もフルート協奏曲と同様に、フルートの技巧を遺憾なく発揮した作品であり、作曲スタイルもひじょうに近い部分が多い。たとえば、ドゥヴィエンヌの協奏曲の特徴として、第1楽章の主題の数が極めて多いことが挙げられるが、協奏交響曲においても、次々と新しい流麗な主題が繰り出され続ける。そのため、全体の構成としてはやや散漫な印象も受けるが、新しい主題と前に出てきた主題の変形を上手く織り交ぜることで聴衆を飽きさせない工夫をしているとも言えるだろう。

楽章構成はやや長いAllegroの第1楽章に続いて、第2楽章はAdagioの序奏の後にAllegrettoの変奏曲が奏される。Adagioを第2楽章、Allegrettoの変奏曲を第3楽章とも考えられるが、Adagioが1分以内の短いセクションであり、フルートに旋律らしい旋律や、独奏として対比され得るパッセージが見られないことから、AdagioとAllegrettoは続けて演奏される単一楽章であると考えられるべきであろう。

A. ジョリヴェ：フルートと弦楽のための協奏曲

20世紀フランスの作曲家、アンドレ・ジョリヴェ（1905-1974）はフルートという楽器に対して、原始的な音楽における神聖な役割を担う楽器として重要な地位を与えていた。彼自身がフルートに対してそのようなイメージを抱いていたことと、同時代のフルート奏者、J.P.ランパルとの親交によってインスピレーションの享受と共同作業がなされたことは、ジョリヴェが数多くのフルート作品を生み出した要因であると言えるだろう。

ジョリヴェの作曲技法の特徴は、師であるル・フランによる和声、対位法、古典形式の徹底的な教授と、エドガー・ヴァレーズから影響を受けた革新的な作曲技法や無調による音塊という両極端にある様式の統合にある。ジョリヴェの後期の作品である《フルートと弦楽のための協奏曲》はまさに、初期のラディカルな無調作品と、第2次世界大戦後の中期に見られる古典回帰的な作風の両面を感じさせるものである。

作品の構成は基本的に緩急・緩急の4つの部分からなる単一楽章である。第1部は極めて叙情的な旋律を持つが、その背後で弦楽器によって演奏される和音は複雑な響きを内包した音の塊である。第2部は軽快な3拍子のスケルツァンドで、展開部、再現部を持つことから一種のソナタ形式だとも考えられるだろう。第3部は第1部を回想して最初の主題が奏される、短い弦楽主体のセクション、第4部は複雑、かつ活発にフルートと弦楽が躍動するフィナーレである。

出演者プロフィール

江戸聖一郎（フルート）

京都市立芸術大学音楽学部卒業。大学卒業後に渡仏、フランス国立オールネイ・スー・ボワ音楽学校において、パトリック・ガロワ氏に師事し、同校を審査員満場一致の一等賞を得て卒業する。帰国後、京都市立芸術大学大学院音楽研究科修士課程を修了。

現在は大阪音楽大学ザ・カレッジ・オペラハウス管弦楽団に在籍し、関西を中心にオーケストラプレイヤーとして活動している。またメガネ男性フルート奏者4名による演奏グループ、アンサンブル・リュネットに所属し、幅広い活動を展開。斬新で自由なスタイルが話題をよび注目を集めている。

パールフルートギャラリー（大阪）教室講師。これまでに、フルートを赤穂由美子、待永望、大嶋義実、瀬尾和紀、パトリック・ガロワの各氏に、リコーダーを秋山滋氏に師事。

瀬尾和紀（フルート）

パリ国立高等音楽院を審査員満場一致の一等賞（プルミエ・プリ）を得て卒業。これまでに故高橋安治、レイモン・ギオー、クルト・レーデル、パトリック・ガロワ、ブノワ・フロマンジェ、故アラン・マリオン氏の諸氏に師事。また同音楽院大学院課程ではオーボエのモーリス・ブルグ、ピアノのクリスチャン・イヴァルディ、ヴァイオリンのアミ・フラメールといった他の器楽奏者の下で研鑽を積む。在学中より「ニールセン国際音楽コンクール」、「ジャン＝ピエール・ランパル国際フルート・コンクール」、「ジャン・フランセ国際音楽コンクール」、「ジュネーヴ国際音楽コンクール」などで立て続けに受賞したのを機にソリストとして世界各地にて活動を始める。日本では1999年に東京都交響楽団とイベールのフルート協奏曲を共演してデビュー以来、東京シティ・フィルハーモニック管弦楽団、新日本フィルハーモニー交響楽団、日本フィルハーモニー管弦楽団、読売日本交響楽団、札幌交響楽団、広島交響楽団、九州交響楽団、大阪フィルハーモニー交響楽団など各地のオーケストラからソリストとして招かれ共演を重ねている。

現在はフランスと日本を行き来しながらヨーロッパ諸国やアメリカ、カナダ、中国、韓国などでコンサート活動を行い、またフィンランドのクフモ室内楽音楽祭をはじめラジオ・フランス・モンペリエ音楽祭、濟州島音楽祭、世界各地のフルート・コンヴェンションなどにも招かれている。

ピアニストの上野真氏（京都芸術大学准教授）とのコラボレーションによる《モシェレス：フルートとピアノのための作品集》が2014年12月に、《ツェルニー：フルートとピアノのための作品集》が2015年春にそれぞれNAXOSよりワールド・リリース予定。

また後進の育成活動にも熱心に取り組み、2009年夏より毎年行われている秋吉台ミュージック・アカデミー（山口県）では音楽監督を務めている。

1999年京都芸術祭賞、2000年北九州市民文化賞、2004年福岡県文化賞をそれぞれ受賞。

栗辻聡（指揮）

京都市少年合唱団、京都市立音楽高等学校（現京都市立京都堀川音楽高等学校）クラリネット専攻を経て、2007年京都市立芸術大学音楽学部指揮専攻に入学。2011年、同大学を首席で卒業し、音楽学部賞並びに、京都音楽協会賞を受賞。学内演奏会に多数出演。2012年10月より、オーストリア国立グラーツ芸術大学大学院オーケストラ指揮科にて学ぶ。

指揮を、秋山和慶、尾高忠明、増井信貴、谷野里香、マルティン・ジークハルトの各氏に師事。また指揮マスタークラスにて、井上道義、湯浅勇治、飯森範親、下野竜也、ヨハネス・シュレーフリの各氏からの指導を受ける。

ムジカA国際音楽協会会員、(財)明治安田クオリティオブライフ音楽奨学生、2012年度(財)ロームミュージックファンデーション音楽奨学生。